

---

# 月と向日葵はうたう。

水無月 十七

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

円と向日葵はうたう。

### 【Zマーク】

Z2638D

### 【作者名】

水無月 十七

### 【あらすじ】

「彼女には違う時間が流れている気がした」「普通の少年、高瀬ショウとミステリアスな“眠り姫”仲野リオのほのぼのとした物語。多分恋の話（になる予定）

少女から少年は見えなかつた。あまりにも先すぎて、輝きすぎて。

「え・・・・・な、仲野！おはよー！」

「・・・・・おはよう。」

これが、俺 高瀬ショウと仲野リオの初めての会話だつた。

その日、俺は7時30分というあり得ない時間に学校へ來た。  
サッカーの自主練をするために。

俺は、サッカー部に入っている中学一年生。運動神経は悪くないけど、生まれつき不器用な俺は、小学校からやつていたわけでもないチーム球技では、すぐに落ちこぼれた。

運動部にしては優しい先輩と、俺の社交性がなければ、きっと嫌われていただろう。

でも、俺のプレーを見た先輩が苦笑いするのは、もつ耐えられない！！

まだ学校に誰も来ていないのでこの時間なら、周りから「下手！」って言われる恐れがないから、心おきなく練習に励めると俺は思った。（お調子者でも多少は傷つくんですよ～）なのに・・・

（なんでいるんだよ～！？）

俺は、心中でため息をついた。

ため息の原因は、自分の席から俺を静かに見つめている女子 仲野リオだった。

中学一年の一学期。

仲野は、こんな時期に我が一年C組にやつてきた転校生だった。小柄で色白。色素が薄めな焦げ茶色の髪は、尻まで届くほど長かった。

彫りが深く、目つきがきつい顔立ちにはクラスの大半が少し引いた。んで、転校早々ついたあだ名が“眠り姫”。

仲野は、みんなに「よろしくの一言も言わず、指示された席に着くと、一時間目から爆睡。四時間目終了のチャイムで計ったように起き出すと、弁当を手にふらつとどこかに消えてしまった。

それから後も、先生がいくら叫んでも起きなかつた仲野は、ついに終学活まで寝ていた。でも、下校時刻になると幻のように消えていた。

クラスの派手な女子たちは、「キモい」だの「むかつく」だのいろいろ言つてゐるけど、思つたより長いまつげで縁取られた目とか、結構可愛いと俺は思つんだ。

こんな変わつた転校生が来て、もう三週間になる。先生たちはついに仲野を起しすことをあきらめた。今では、仲野の寝息がクラスのBGMになつてゐる。

(まさか、こんな時間にいるなんて……)

「仲野、お前来るのはえーな。いつもこんな早くに来てるのか?」「戸惑いながらも、精一杯のにこやかな笑顔で話しかけてみた。

「……………」

・・・シカト?マジですか?

いやっ、くじけてはいけないぞ俺！

自分で自分に喝を入れると、どうにかして仲野とコンタクトをとろうとする。

この血主練を秘密にしてもらひたため。

「な、仲野はや、何でこんなに早くに来るんだ？」

ヤバイ。ごもつてしまつた。しかもなんて答えにいく質問をするんだ…。

あいつ、仲野だつて引くに決まつてる…。

「なぜ、理由がいる？」

・・・は？

何この西。

えつー？もしかして？？もしかすると？

「なぜ理由が必要なのだ？」

まぎれもなく、この、よく響く少し低めの声は仲野のものだつた。

(つーか・・・)

言葉遣いおかしくねえ？

『なぜ』とか『なのだ』とか…。

今どきふざけでても言わねーよな。

「答えられないのか？」

「うえ？」

ボーッとしていたせいか、変な声を出してしまつた。

「ならいい。」

仲野は、無表情に言つと、俺に張り付いていた視線を手元に落とした。

その手には、今まで気付かなかつたが本がにぎられている。でも、俺にそんなこと気にしている余裕はなかつた。仲野になんとかしてこの自主練を秘密にしてもらわなければ！

「仲野……」

俺は勇気を振り絞つて声を掛けた。仲野は、ゆっくりと顔を上げる。

「？」

「あ、あの、さつきはこっちから聞いといて、シカトして悪かつた。えつと・・・お前に頼みがあるんだ。」

「頼み？」

「えつと、その・・・俺が朝早く来ていることみんなには黙つて欲しいんだ。」

仲野は、じつちが苦しくなるほど見つめてくる。そのためか、俺はものすごく緊張していた。まるで、裁判に来た犯罪者のよつ。

「別に構わない。」

仲野は厳かに告げた。

俺は、自分でもビックリするほど安堵していた。

「そつかー！ ありがとなー！」

しつかりとお礼を言つ。（人間関係良好のための秘訣！）

「ただ・・・」

「え？」

「私はお前の名前を知らない。」

びびった・・・

仲野に真顔で声かけられると、何もしなくても緊張する。

「やういや、まだ言つてなかつたもんな。俺、高瀬ショウ。よろしくな！」

「ああ。」

仲野の素つ氣ない態度はもう氣にしないことにする。

でも、この変な言葉遣いの少女が俺はいたく気になつた。

「なんでこんなに朝早く来ているの？」、「なんで授業中寝ているの？」、「どうしてそんな風に喋るの？」・・・聞きたいことは山積みだつた。

でも、サッカーの練習に早く行かないと。これじゃあ本末転倒になつてしまつ。

俺は、昨日體つたばかりの四字熟語を思い出しながら校庭へ向かつた。

9月の半ば。

そろそろ高くなつてきた空は、今日もキレイに青かつた。

青空（後書き）

どうも。水無月十七と申します。

このよつな駄文にお付き合こトセリ、本当にありがとうございます。  
少しでも、シヨウガリオ達を笑いでくれたら幸せです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2638d/>

---

月と向日葵はうたう。

2010年10月10日04時30分発行